
嘘つきな君

R-third

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきな君

【Nコード】

N6735S

【作者名】

R - t h i r d

【あらすじ】

大人で優しい男の子とされている、学園のアイドル的存在の男子の子、『悠馬』。

そんな彼が恋したのは、上品で可憐な美少女として絶大な人気を誇る、『空』。

でも、悠馬が好きになったのは、彼女のそんな姿ではなく…。

00・告白(前書き)

各話のタイトルは、下記お題サイト様からお借りしています。
とつても素敵なお題ばかりで、創作意欲を掻き立てられます！

サイト名 : 恋したくなるお題 (配布)

管理人 : ひなた様

URL : <http://members2.jcom.home.ne.jp/seiku-hinata/>

ちなみにヒロイン 空と、悠馬の親友 太一は、連載中の小説『My Sweet Darling?』にもちよこつと登場します。
以前に書きあげていたものを修正しての投稿ですので、今作の更新は比較的早いと思います。

00・告白

ある日の放課後、俺はクラスメイトの一人である、遠野 空を体育館裏に呼び出した。

彼女はとても可憐で上品な、校内でも絶大な人気を誇る美少女だ。

遠野さんは女の子にしては背が高く、スラリとしている。

サラサラで艶やかな茶色の髪は、腰まである。

肌は、まるで陶器の様に真っ白で滑らかだ。

ちょっと高めの鼻、赤みを帯びた形の良い唇。

茶色の大きな瞳は、綺麗に長い睫毛で縁どられている。

初めてみたときの印象は、まるで丁寧に作られた、人形みたいな女の子。

それが彼女だった。

「遠野さん、好きです。俺と付き合ってくれませんか？」

俺は本当の自分を隠して、なるべく大人っぽく見えるよう心がけながらそう言った。

その途端、彼女の眉間に僅かながら皺が寄った。

…やっぱり、無理だよなあ。

彼女はその見た目の所為もあり、とてももてるらしい。

そのため、告白する奴も後を絶たない。

まあ、俺は彼女の見た目に惚れたわけじゃないんだけど…。

しかし、告白してOKの返事を貰った奴は今まで一人もいない。

彼女は、告白されてもいつも速攻で断るらしい。
それで男子の間でひそかに付けられた彼女のあだ名は、『鉄壁の美少女』。

俺は彼女への気持ち膨らみすぎて、我慢できず玉砕覚悟で彼女に告白することを決めた。

幸か不幸か、彼女とは全くと言っていい程喋ったことがなかったから、特にこれ以上関係が悪くなるということもないしな…。

遠野さんは小さな溜息をひとつ吐いて、それから言った。

「ちょっと、考えさせて？」

彼女の言葉に、俺の頭は一瞬停止する。

…え？

何、その微妙な返事？

もしかして、ちょっとは見込みありなのか？

俺は彼女の真意が全く分からなかったけど、速攻で断られなかった嬉しさのあまり、顔が緩んでしまった。

それを了解の合図と受け取ったのか、彼女はにっこりと微笑んだ。

01・君の「ほんと」を知ってるよ

学校が終わり家に帰ると、俺の部屋ではいつもの様に近所に住む悪友の太一が、当然の様に寛いでいた。

「よう、悠馬。お帰り〜！ちゃんと振られてきたか？」

太一がニヤニヤしながら、聞いた。

「…いや。告白はしたんだけど、振られてはいない。」

俺がそう答えると、太一はちょっとびっくりした様な表情に変わった。

「なんだよ、それ？OKの返事を貰ったんなら、もうちょっと喜んだらどうなんだ？」

彼は、怪訝そうに首を傾げて言った。

「…OKと言われたわけでもないんだよな。彼女、ちょっと考えさせて欲しいって。」

俺が答えると、奴は眉間に皺を寄せ、言った。

「…なんか、微妙だな。」

確かに、太一の言う通りだ。

彼女の返事は、とても微妙なものだった。

…死刑の執行を、先送りされているような気分になってきた。
でも、彼はまたすぐにニヤリと笑い、続けた。

「でも、まあ、いんじゃないの？」

『鉄壁の美少女』から保留を貰えた奴、今までいないんだろ？

ホント、いい男は得だよな〜！」

全く、人事だと思って…。

俺は以前付き合っていた女の子から、こう言って振られたことがある。

「なんだか、悠馬って、見た目より子供だよな。」

…想像してたのと違って、なんか、がっかりした。」

これは正直、かなりショックだった。

確かに俺は、無駄に落ち着いて見える見た目の所為で、『悠馬って、大人だよな！』などと言われている。

でも俺は、実際はそんなに大人なんかではない。

どころか、太一とか親しい友人には、仲間内で一番ガキだと言われている。

勝手に勘違いして、告白してくる女子も少くないけど…。

俺は遠野さんを初めてみたとき、正直全く興味を持たなかった。

人形みたいに彼女は綺麗だったけれど、なんだか感情を持たない作り物みたいで。

学校にいるときの彼女は、誰に対しても優しく、穏やかだ。

それが悪いことだとは思わないけど、俺の好みのタイプではなかった。

だから本当に、彼女をただのクラスメイトとしか思っていないかったんだ。

あの日、隣町の公園で、彼女を見るまでは…。

あの日の夕方。

友人の家に寄った帰り、たまたま公園でサッカーをする子供たちを見掛けた。

なんだか元氣一杯で、微笑ましいな、なんて思って最初のうちは見ていたんだけど。

その子達と一緒に泥んこになって、夢中で走り回るジャージ姿の少女。

顔は全く分からなかったけど、その姿はキラキラ輝いて見えた。

「こら、健斗！ゴールまでもうちよつとじゃんっ！途中であきらめるんじゃないわよっ！？」

少女が大声で叫んだ。

その声は、誰のものかは分からなかったけど、何処かで聞いたことがあるような気がした。

そして、俺は少し近づいて、目を凝らして彼女をじっと見つめた。

…これって、まさかあの遠野さんっ！？

子供たちと必死にボールを追いかけている、輝くような表情で子供みたいに笑う彼女。

その時の衝撃といたら、半端なものじゃなかった。

あの大人しくて、クラスで優しくただ微笑むだけの彼女とは全く別

人の様な遠野さんに、俺は一瞬で心奪われてしまった。

同じクラスになって、既に3か月以上が経っていた。

…それでも俺は、間違いなくこの時 彼女に一目惚れしてしまったんだ。

翌日、今度は彼女が俺を体育館裏に呼び出した。

「昨日の話だけど…。私でよかったら、お願いします。」

彼女の言葉に、俺は一瞬で舞い上がってしまった。

「よかったっ！マジで嬉しいっ！これからよろしくね、遠野さん。」

俺は、いつもの『大人な俺』の演技なんかすっかり忘れて、本来の自分を彼女に見せてしまった。

彼女は一瞬とても驚いた表情を浮かべたけど、それからふわりと微笑んでくれた。

彼女が付き合おうと言ってくれたのは、本当の俺じゃないのかもしれない。

でも俺は、君の「ほんと」を知ってるよ？

もしそう言ったら、君は一体どんな顔をするんだろう？

02・そういつトコが好きなんだけど

そして俺達は、所謂恋人という関係になった。
学園一の美男美女カップルの誕生、とかなんとか言っ
て、皆大騒ぎ
していた。

美男美女って…。

彼女はまだしも、俺、そんな風に思われてたんだ…。
なんか、自分の事じゃないみたいだな…。

そう思ったけれど、俺は彼女との関係が皆の公認になったことが嬉
しくて、敢えて否定はしなかった。

遠野さんは、ただ曖昧に笑っていたんだけれど…。

彼女は俺同様、特に部活はやっていない。

事前のリサーチで、しっかり確認済みだ。

俺も彼女も電車通学だったため、駅まで一緒に帰ろうと思いついて
声を掛けてみた。

彼女は一瞬驚いた顔をしたけど、すぐに頷いてくれた。

「君のこと、空つてよんでもいいかな？」

俺は、勇気を出してそう言った。

付き合ってるとはいえ、彼女とは今まで殆ど喋ったことがなかった
から、正直かなり緊張してしまった。

彼女の親しい友人達は皆そう呼んでるみたいだったけど、ちょっと
図々しかったかな？

でも、彼女は頷いてくれたから、心底ホッとした。

嬉しさのあまり思わず顔がにやけてしまうのを感じたけれど、自分

の顔だというのに全くコントロール出来ない俺。

「俺のことも、悠馬って呼んでくれたら嬉しいな!」

調子に乗ってそう言ったら、彼女は下を向いてしまった。

不安になった俺は、彼女の手をそっと握って、もう一度言った。

「ねっ!悠馬って、呼んで?」

「…悠馬。」

彼女が小さくそう呟くと、嬉しさのあまりどうにかなくなってしまったんじゃないかというくらい俺の心は舞い上がってしまった。

…もう俺、死んでもいいかも。

勿論、彼女と両想いになれた今、死ぬなんてホントは真っ平ご免だけど。

そんな事を考えていたら、いつの間にか彼女も笑顔になっていた。

それは、あの日公園で見た彼女と同じくらい楽しそうで。

俺は彼女に告白して良かったと、心から思った。

彼女が好きなのは、『大人な俺』なのかもしれない。

でも俺は、どうも彼女の前ではホントの自分に戻ってしまいうらしい。ちよつと、気をつけた方がいいかもしれない。

…例え偽りの自分でも、一度手に入れた彼女を失うのだけは、絶対に避けたかったから。

それから俺達は、駅の近くのカフェでお茶をして、別れた。

木曜日、俺はいつものように、一緒に帰ろう、と声をかけた。それは、告白をした日から、毎日続いている。

「ごめんね、悠馬。今日はちょっと、予定があるの。」

彼女は申し訳なさそうに、言った。

そっか。彼女、今日はまた子供たちと約束してるのかな？

俺は、仕方がないね、と言って、笑った。

本当は彼女とまたコーヒーでも飲んでから帰りたかったけど、あまり我儘を言うわけにはいかない。

だから、そんな気持ちがあればいいよう、また『大人な俺』を演じてそう言ったんだけど、彼女は何故か少し悲しそうな表情を浮かべた。その理由が何なのか、この時の俺には全く見当もつかなかったんだけど…。

金曜日。また彼女と駅までの道を一緒に歩いて帰った。

しかし、その途中で事件は起きた。

「わあああんっ！」

公園で号泣する、小さな少女。

どうしたの、と空が聞くと、風船が木に引っ掛かってしまったの、と悲しそうに答えた。

「取ってあげるから待っててね！」

そう言うと、空は鞆を木の根元に置き、枝に手をかけた。

おいおい、空っ！それじゃ、下着が丸見えだろっつ！？

正直俺の理性にも自信がなかったし、他の奴に彼女のそんな姿を見せるのだけは絶対に嫌だった。

「…空、スカートじゃ登れないだろうっ！？俺がとってくるから、鞆持ってっ！」

俺の言葉を聞き、彼女は大人しくコクリと頷いた。

それから俺は木に登ったんだけど、木登りなんか本当に久しぶりだったから足を少し痛めてしまったようだ。

ああ、俺、ホント格好悪い…。

でも、幸い彼女はその事には気付いていないみたいだった。

「はい、どうぞー！」

俺は少女に、風船を手渡した。

「…ありがとう！」

女の子は嬉しそうに笑ってそれを受け取ると、駆けて行った。

少女がいなくなると、ふたりの間に気まずい空気が流れた。

その後空は、何故かこちらを全く見ようとはしなかった。

もしかして、木登りしようとした事で、俺が彼女を嫌いになったとも思っただのかな？

俺は空の、そういうトコが一番好きなんだけど…。

沈黙を先に破ったのは、俺のほうだった。

「今、俺と一緒にいるのは、本当の空じゃないよね？」

俺は空の方を見てそう言ったんだけど、彼女は視線を上げようとはしなかった。

無言のまま、自分の足元を見つめ続ける空。

俺は続けた。

「もう、これ以上…。」

『俺の前では本当の自分を偽って欲しくないんだ！』

俺が最後まで言い切る前に、彼女は自分の鞆を捨てその場を走り去ってしまった。

俺は必死で追いかけたんだけど、さっき木に登った時に足を挫いてしまっていたため彼女に追いつくことは出来なかった。

必死で彼女の名前を呼んだんだけど、空は止まってはくれなかった。…さっさと本当の事を言わなかったから、この時俺は大切な彼女を深く傷つけてしまったんだ。

03・ただ声が聞きたいだけ

その日俺は、何度も彼女の携帯に連絡を入れた。でも、電話もメールも、一切返って来る事はなかった。

俺は、自分が思っていた以上に、彼女のことを好きになっていたらしい。

だけど、次に会ったとき、彼女は俺に別れを告げるかもしれない。

…そんなのきつと、今の俺には耐えられない。

俺なんかに、本当の彼女を見せてくれる事はないのだと思うと、とても胸が痛んだ。

今までは見ているだけで満足だったのに、彼女を手に入れた今、俺はとても貪欲になっている。

まだ本当の自分を見せることが出来ていないし、彼女のどんなところを好きになったのかも伝えてもない。

でも、彼女の事を諦めるなんて、今の俺の選択肢にはない。

明日は幸か不幸か土曜日だから、学校は休みだ。

答えを先延ばしにしたところで、何も変わらないことは分かっているけど…。

次の日の朝、休みだというのに何だか早く目が覚めてしまった俺は、リビングでダラダラと一人、テレビを見ていた。

すると兄貴がやってきて、ニヤニヤ笑いながら言った。

「なんだ？悠馬、もう起きてたのか？」

そういえば、一人前に彼女が出来たとか騒いでたから、今日はデートか？

それでこんなに早くから起きてるなんて、お前、ホント青いよなあ……。」「

「うるせえよっ！……デートなんかじゃ、ないし。」「

俺が唇を尖らせて言うと、兄貴はまた可笑しそうに笑った。

「なんだよ、もう振られちゃったのか？だっせえやつ！」「

振られてなんか、ねえよ。…まだ。

あれ？そう言えば兄貴、ジャージ着てるな。

…ってことは、今日は兄貴がコーチを務める子供たちの、サッカーの試合の日っ！？

「なあ、兄貴っ！今日は、試合の日？」「

俺が聞くと、兄貴は驚いた様な表情で言った。

「な、なんだよ。鼻息荒いな、悠馬…。」

ああ、そうだよ？お前、サッカーなんか興味あつたっけ？暇だつたら、ついてくるか？」「

もしかしたら、彼女も試合を見に来ているかもしれない。

神様は、まだ俺を見はなしてはいないようだ。

「行くっ！」「

俺は大声で叫んで、準備のため二階の自分の部屋に駆け込んだ。

小学校に着くと、もういくつかのチームは到着していた。

俺は最初、試合そつちのけで彼女の姿を探した。

兄貴には、何しに来たんだか、と呆れられたけど…。

でも、彼女の姿を見つける事は出来なかった。

そもそも、彼女が来ているのかどうかさえ、全く分からなかったんだけど。

試合中、俺は全てを忘れて、必死で兄貴のチームの子供たちを応援した。

家で一人していると、不安と後悔に押し潰されそうだったから ちょうどよかった。

試合は残念ながら負けてしまったけれど、子供たちはみんな清々しい笑顔を浮かべていた。

「残念だったな。でも、よく頑張った!」

兄貴が子供たちの頭を撫でてやると、皆、嬉しそうにニコニコ笑った。

試合が終わると、子供たちは着替えに行ってしまった。

それから俺は、一人校庭に戻った。

そして、ゆっくり考えを巡らせる。

…俺はあの子達みたいに、全力を尽くしてはいない。
まだ、諦めるわけにはいかないんだっ！

会って、何を話すかなんて、分からない。
でも、ただ 彼女の声が聞きたい…。

その時、遠くでホイッスルが鳴るのが聞こえた。

前を見ると、グレーのトレーナーにジーンズというラフな格好の女の子が一人、ベンチに腰を掛けているのが見えた。
その顔はよく見えなかったけれど、俺が彼女を見間違えるはずがない。

「空？」

声を掛けると、彼女はゆっくりと振り返った。

「…悠馬？どうしたの、こんなところで…。」

空はびっくりした様子で、小さく呟くように言った。

04・何度でもこうして、ほら

そんな彼女の姿を見て、俺は笑顔で答えた。

「俺の兄貴が教えてるサッカーチームの子達が、今日の試合に出てたからね？」

それから俺は、口を尖らせて言った。

『大人な俺』なんかではなく、『本来の自分自身』の言葉で。

「昨日、なんで急に帰っちゃったの？心配したんだよ？」

それに、電話もメールも、全部無視だし。」

彼女は何も言わない。でも、俺は続ける。

「やっぱり、俺には本当の空は見せて貰えないのかな？」

もうこれ以上、俺の前では本当の自分を偽って欲しくないんだけど。」

その言葉に、空は瞳を見開いた。

「やっぱり、気付いてなかったか…。」

俺は、思わず苦笑した。

やっぱり彼女は、俺がどんな空を好きになっただかなんて、知らなかったんだ。

そして、その事が彼女を傷つけたであろうことを思うと、また少し胸が痛んだ。

「俺、知ってたよ？空が、近所の子供達にサッカー教えてるって。本当の空は、上品でおとなしいだけの女の子じゃないって事も、ね？」

彼女の目を見て、ゆっくりと告げた。

彼女にどうしても俺の本心を知ってもらいたくて。

人形のように綺麗なだけの彼女ではなく、泥んこになって駆け回っていた、あの時の彼女を好きになったんだという事を、ただ伝えたくて。

「最初に見たときは、ほんとびっくりしたよ！」

あの遠野さんが、ジャージ着て、大声あげて子供達とサッカーしてるんだから。

でも、その姿を見て、俺は空に惚れちゃったんだよねえ…。」

俺は思わずすすすす、笑い出してしまった。

彼女の驚いたその表情が余りにも可愛くて。愛おしくて。

ほら。俺は彼女に、何度でもこうして恋をするんだ。

それを聞いた彼女の瞳から、大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちた。

突然泣き出した空にとても驚いたけど、その姿を見て、俺は不謹慎ながらちよつと嬉しかった。

次の瞬間、俺は彼女を抱きしめて、耳元で囁いた。

「やっと、逢えた…。空、大好きだよ！」

多分、今の俺は子供みたいに笑ってる。

でもこれから俺は、君にはホントの自分を見せるから。

だから空も、俺にだけはホントの自分を偽らないで？

05・ラスト・チャンス

これがかつと、本当の空を捕まえることのできる　ラスト・チャンス。

そう思つて、彼女を抱きしめる腕に力を込めた。

すると彼女は、嬉しそうに笑つてくれた。

…それは俺が恋した、大好きなキラキラの笑顔、そのものだった。

「私も、悠馬の事が大好き！もう離れないから、覚悟してね？」

無言のまま二人、しばらく抱きしめあつていただけ。

今度は彼女は、悪戯っ子の様に笑い、言った。

「でも、私が好きになつたのも、クラスで見掛ける『大人な悠馬』なんかじゃなかつたんだよ？」

それは学校の帰り、駅に向かう途中でのこと。

雨の中、俺は傘を持っていなかったのか、すごい勢いで走ってきたらしい。

「冷て〜っ！あつ、遠野さんだ！すごい雨だね？」

そう言いながら俺は、びっくりする位楽しそうに笑い、彼女を追い越して行つたんだって。

「私は、そんな悠馬の表情に 心奪われたんだよね。」

それから気がつくと、貴方のことを目で追う自分がいたの。

また、あの笑顔が見れないかな、と思つて。

…私はあの時、貴方に恋をしたの。」

そう言う時彼女は、クスクスと可笑しそうに笑つた。

なんだ、そうだったんだ。

君にはもう、とっくにホントの自分がばれてたんだね？

「俺も、もう空を離さない。だから、そっちこそ覚悟しなよ?」

俺達は抱き合つたまま見つめ合い、それからどちらからともなく
またクスクスと笑つた。

05・ラスト・チャンス（後書き）

『嘘つきな君』 完結です。

気が向けばまた、こちらの短編の空視点も、公開するかもです。

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735s/>

嘘つきな君

2011年4月28日05時24分発行